鹿兒嶋戰爭日記
四号

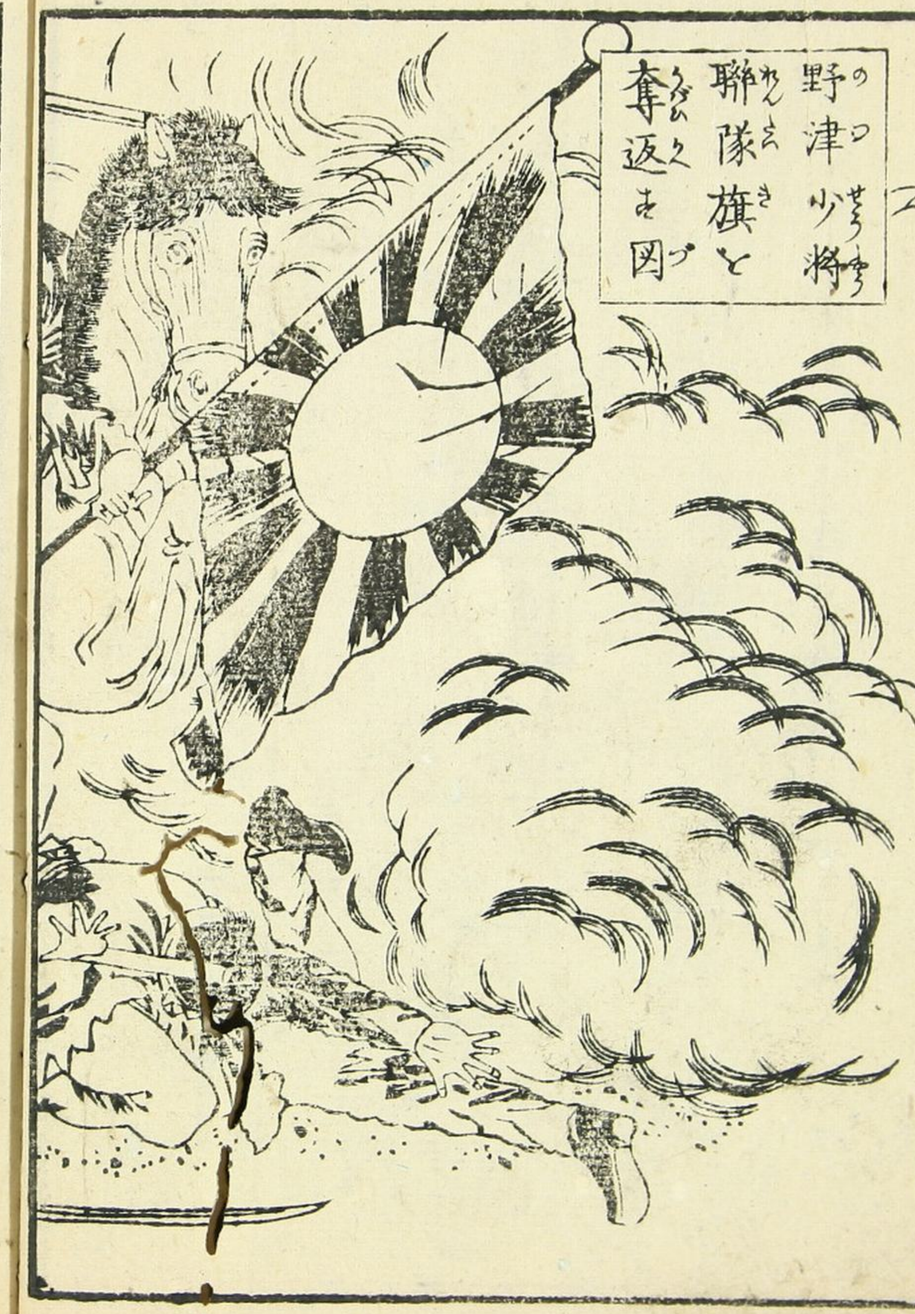
暴徒方宿陣之標札

御届明治十四年四月吾

鹿兒島藩新政府大總督
正三位陸軍大將西鄕隆盛 本陣

卷中総て電報を摸寫まるゆへ前後ふ
事を記ものを侭ゆる時日紛乱ハ見免一玉へ

A429
4
010190510110
48-7880

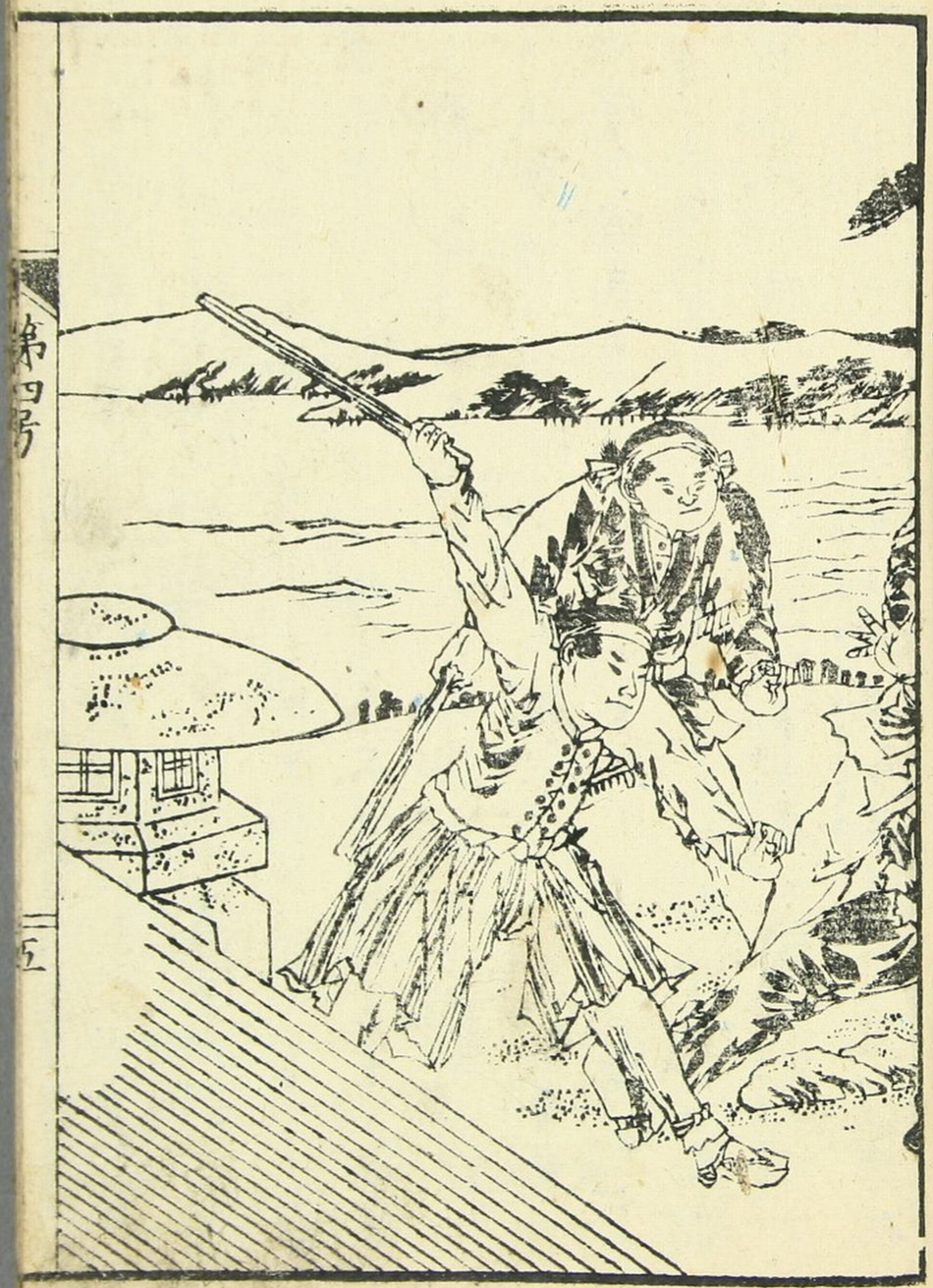

野津少将
聯隊旗と
奪返を図

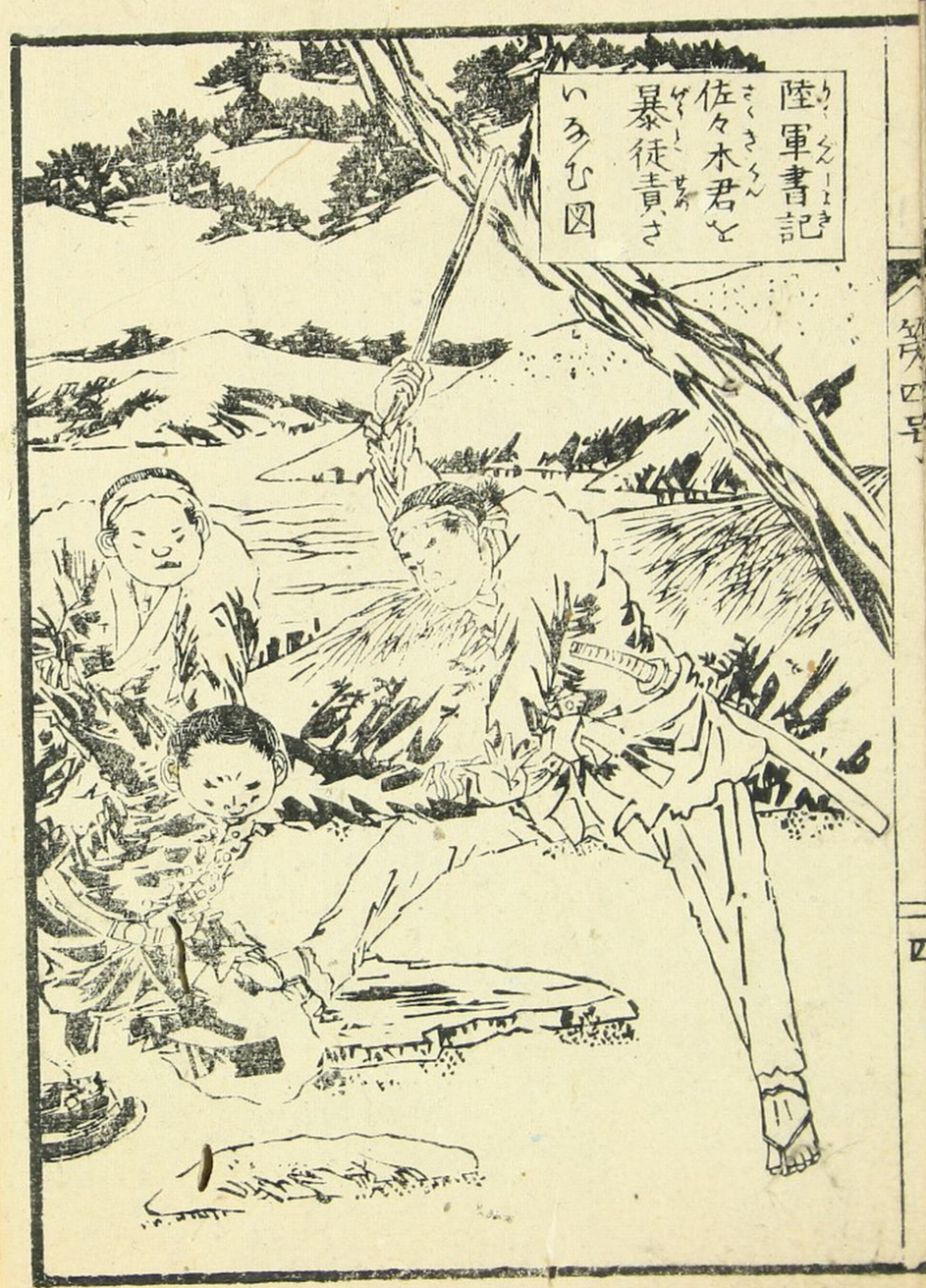
此ヨ説ハ暴徒初発の去々月三十一日鹿児島ヨ
ゟ硝茅と官船ヨ積入ると拒ミ以来傭人ハ
尽く散り去りて一人も近づかぬ一夜数盗ゟ擅
ち門戸と共ゟ押入り倉庫を毀ち弾茅を掠め
ゟる史海軍書記佐々木君ハ残茅護守の力及
バざるを諭り一計を案ト自ら数百桶ゟ水を汲
み遍く硝茅ヨそぎ撒ケまゝ無用の品とゟ
ゟの夜尚又数賊入りきゟ昨夜のごとく乱暴ー
硝茅をのち去らんとせーゟ水ヨ需ゟ用
立ざれば賊ハ大きゟ怒り忽ち佐々木君を捕へ

あ且ハ君ゟ業ゟんと頭をうち其面を蹴乱
拳混ぜども佐々木君ハ一切挙ゟず満面血ヨ
染まり息も絶ぐゟ賊ハいまゞ怒り止ばして
庭の池中ゟ投入と瓦礫を打つけ攻さゟ目も当
らぬ有様ゟり稍雑明ゟるれば賊ハ何地へ
ゟ散り行きゟる此時佐々木君ハゟと息をつき
辛くも命を助ゟり海辺ゟゟり小舟ヨ自ら棹
さー桜島ヨゟり長官ヨ右の次第を詳ゟ語り
ゟる長官ハ佐々木君を別懇の家へかくー万死を出て
一身を全ふー太平丸ゟ乗ト東京へ帰ることゟ

○三月三日横濱出帆の廣島丸へ寺田陸軍中佐
池田陸軍中佐内藤陸軍大尉その外士官百人と
水兵百二十人看病卒三十五人乗りこゝ神戸へ寄
り直ふ下の関へ向け出帆せり仙臺名古屋大坂廣
島の第一後備軍へ直ち召うせらるゝ常備隊ハ編
入ハ五日四日出の電報ハ三日の午前七時ハ山
鹿口ハ大戦争ハ官軍ハ勝つハ乗じ手繁く
追撃ー賊ハ農家ハ乱入ーたりとハ先月廿七日
の戦ひハ三好少将もとー薄手ハ此時官軍
ハハも死傷ハ吉井少佐も討死されーともハ

○廣児島寄留の外国人ハ傷殺されーとハ風聞有
との事詳ハ又今月一日ハ休戦ハ二日ハ戦
争とハき三日ハ植木村ぐハ午前十時ハ午後
三時までの戦ひハ同月四日午後南の関ハ
の電報ハ三日午前六時ハ大進撃ハ双方烈
ー戦ひ官軍勝利遂ハ此方ハ田原山まぐ進ま
死傷ハ少なく同所ハ熊本城の兵と通ぜる道を開
との報知あり又伊勢鈴鹿山へも警衛の為手当ハ
り暴徒ぐさハ何ハ失望ハかゝて熊本へ出張
同所の鎮臺を追ハぞゝ外ハ官軍の廻ハら




陸軍書記
佐々木君を
暴徒責さ
いろむ図

ざるうちは同所の旧城を乗とべ高き山人必ず
勝利あらんと城を本陣とし繰出を謀計なり
しを此方でい早くも察し城を堅固ふかくあしらひ
暴徒方はい残念の有様なり又暴徒はライフル銃
を持つもの二千人をうち其餘多くは刀槍なり
うふ覚悟と聞く西郷の旗おるしは新政厚徳の
四字を書きたるうは人気を取る策なり偖先ごろ
より鹿児島の宿所々へ青竹にて矢来を拵へ「鹿児
島藩新政府大総督正三位陸軍大将西郷隆盛本陣と
いふ標札をたてその外大佐某少佐某などいふ標札
を出しこと勇ましく見せかけるる秋月の士族中田
辺恭中野五郎三郎天野弥蔵石川信敬の四人々
薩へ応援の心得にて脱走せしがいづれも今更
後悔して自首いたし高鍋の士族も叛心なれ
ど動かず先月廿二日は長崎よりの電報は清輝
艦が小島より小舟をおろして小笠原中尉坂本
少尉が水兵と十二人乗せ敵地のようすを探ん
がためは上陸され暴徒はとり囲まれ小笠原君
と水兵四人は本艦へかくりしかど坂本少尉は
疵を負それ本艦へも帰らぬとあり鹿児島は

なる海軍の造船所へ賊がうぢひろ元海軍省へ勤めし有馬ゲ頭だつたるものゝ説もなり先月十九日ゐ熊本の市中を焼たるゝ前日鎮臺より達せらるゝを巡査をとゝ力と尽しく立退人の世話をつゝ人力車へ急ゐ直ゲなりゲ貧窮人へ車とならのまれぬと憐を巡査ゲ金を出し人力車どやゝ情々怪我のやうやう又大切ゐ品を取残さるゆうゐしてゆう其日十二時ゐ焼たらゐ手箸の処立退人を厭もれゝ三十分時刻ゲおゝ是残らを立退きしを見て城内の鎮臺をやき京町の擂一ケ所を残しそれより安政橋辺と三十軒をうゝと坪井辺の六十軒を焼き谷少将よりいさましく是を見て居らゐしと云四日博多よりの電報ゐ五日の朝より大進撃なり今朝もいまゞ戦ひゲ止ぎ高瀬口へ官軍ゲ田原坂まで進を伊倉口ハ吉次越まゞ進ミ熊本の士族と旧佐賀の士族ハ官軍ゐ応援の命を蒙りしと大坂の日報ゐ出て居る旧郡山の士族ハ三百人ゐど相当の御用を命ぜらるゝと西京ゐ願ひ出しゝ由大坂天保山の台臺場ハ是迄も大砲の備

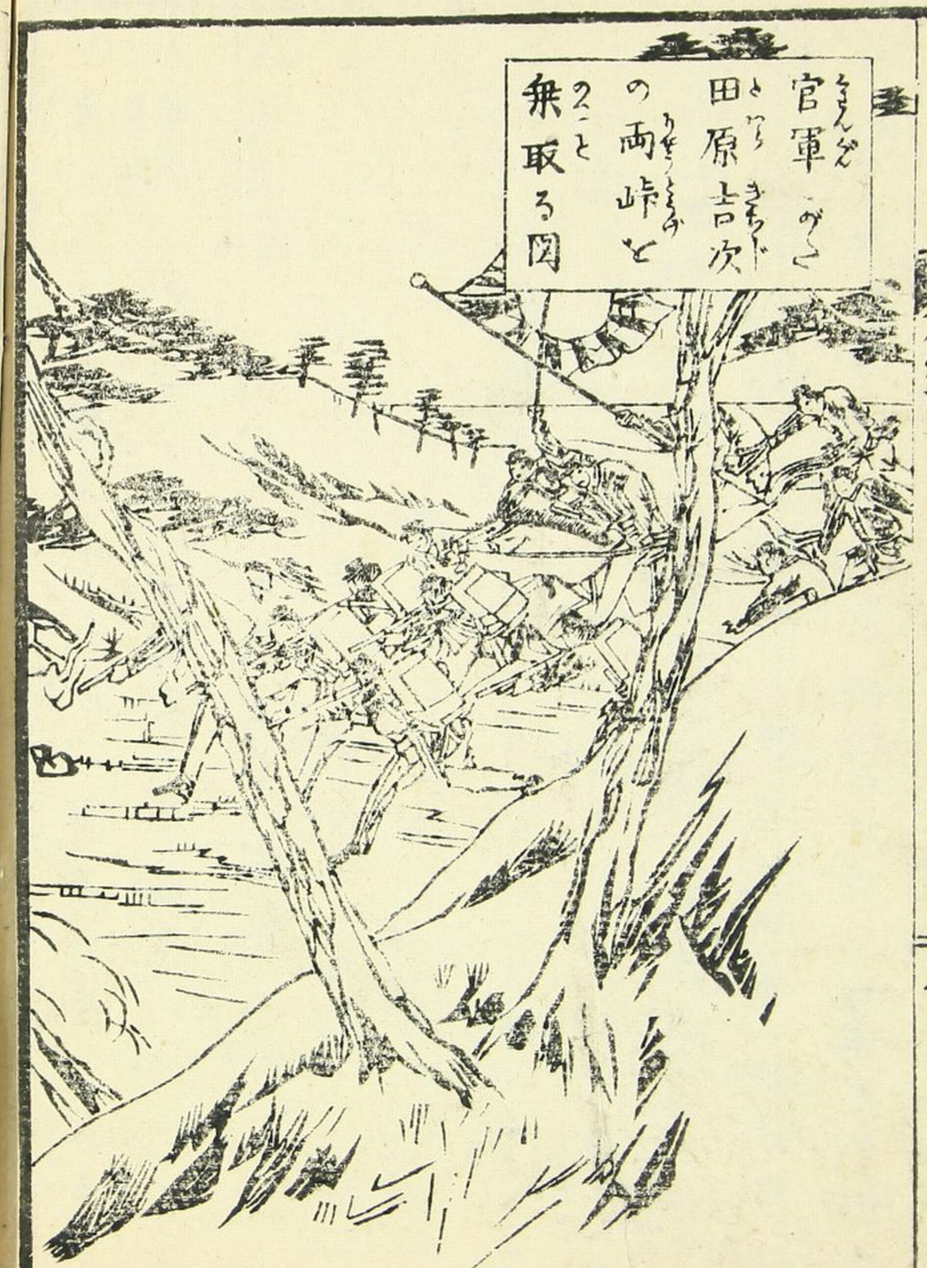
へあるべき此程まさく数門おそをふる五日の電報ふ一昨日熊本手前の植木を乗とり海上ろく戦争なり南の関も乗とりしとあり

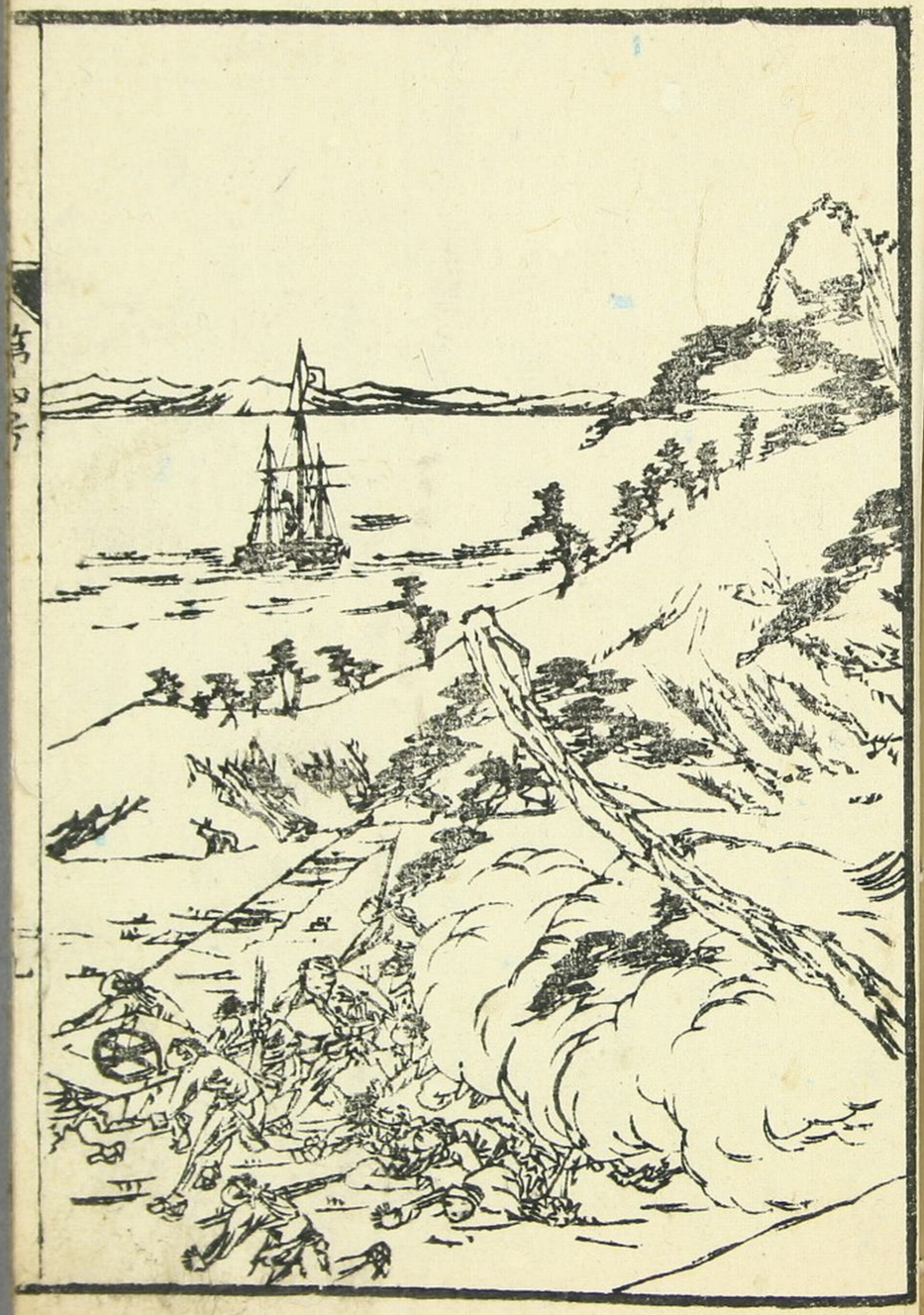
○西京北野の小松原ゟ住居したる鹿児島の士族高島六蔵ハとの程其筋より四手ゞ廻り召捕ゟ

ゟる同所での風説ゟハ何ゟ焼たゝひの企てをせしとゝ

○福岡縣ゟり電報と大坂ゟりの電報六日ふ東京へ達せゝるべさ文ふ一昨日ゟり戦ひつゞき戦争毎ゟ勝利で高瀬口の官軍ハタハル坂と抜けて植木口を乗取り大久保ゟ向ゝて既ゟ熊本へ達し山鹿口も激戦ゟくゟひく賊を打たゝひ海手ハ河内口も官軍進撃し又四日ゟ大坂ゟりの電報ゟ高島大佐の云ハ是しハ熊本ゟり賊兵の陣営をゆたゝひ賊軍大きふ屈し今日の戦ひハゝゝゝゝゝ又別報ゟ谷少将の兵ハ賊兵祇園山へ登りさゝゝく大砲を打ちけ又長崎口と柳川口ゟり賊兵責ゟせゝゝゝの苦戦と

ゝゝ五日博多ゟりの電報ふ賊二大隊菊地へ屯し戦ひゝゝり暴徒ハ応援せゝ熊本の士族ハ鉄炮弾薬の乏しゝゝゝ道案内ゟ出ゝゝゝとの組の


官軍ぐんぐ
田原吉次たはらきちじ
の両峠りやうとうげ
を奪とり
取る図



頭分に高島大佐の手に生ぜしを戦地にて手疵を受けし兵敦賀丸にて品川まで送らを直に病院に入り外に手負の兵船にて大坂天保山の海岸へまいされ同所の鎮臺営へ入るる

○勅使柳原君い今月二日長崎へ着せられ暴徒ハ九州辺へ租税を免しまと難渋人に食せ置るとと云ひふせしと去る四日の戦争に官軍ハ高瀬をうち立て二手に分れ植木へまゝ支へる賊兵を四方へ逐ひ散けく其地を取りて再び山鹿に攻たゝひ一手い河内通りを進軍し大いに賊を北ろをおくく高橋まで矢庭にまむ折ゝ何とかへ逃入るを野津少将ハ見らとゝ走ゝ馬に鞭うち真一文字に賊兵の渦巻中へ乗り入り旗をとらんと争へば賊も容易にさしと支べとぐる者と六人まで斬ゝかとし或ハ蹄に掛ま難るく旗をひ返して徐々と味方の隊中へ引ゝされし景況いあざるしとゝ

○今月五日に河内口の戦ひに福原大佐い腹へ疵と受けられたるど極浅手にて別条なしとぞ

○六日の電報ハ山縣参軍ハ木の葉のたくひハ居ら是黒田公ハ面會されその日の戦ひハ勝利ハて黒田公の手ハて峠を乗ッとり間道の田原吉次の両峠も乗ッとり此上ハ植木とるハ必定もまや熊本へ脉を通ずるとあり同日久留米ハの電報ハ熊本士族旧知事の説諭ハく多分賊ハそむくしとあり

○有栖川の宮へ附属の三大隊ハ博多へ着の夫風波強くして殆ど難渋ハる是ともに漸く今月一日ニ満りあく上陸されしとあり余ハ五号ハ次ぐく

官許 朝鮮人参

牛肉丸

小袋 六錢二厘五毛
中袋 十二錢五厘
大袋 二十五錢

一此ものハ男女ハかぜくまれ中れば是一ひのとさあるとまぎれなく
乳ろとあるとしゆあるとあるとは
まぢろのとさんハまるの外あり
せうちと治せ
のびせをうまげとろさ是ハ
ぜんさいまちるるハろくもあり
まるやハふびんあげきをもあれハ
人つぬぐ用ハ是ハ
ろいいろかくまさハふくとろ
そのまるーなること神のごとー
ハて乳ハのく
やまびハとりくめる
おくるるやさんやは
小児ハ用ひそハいとくとんび
まこまるるやハるせまるのハ
右の外万病ハ用ひて功なり
ものハふまる物
二三十ものるるとび丸の
絵ーまるくのろよろづさー

書物繪店 東京横山町三丁目二番地 辻岡屋文助